SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

バスケットボールスクールの新たな指導体験がコーチングに与える影響：状況判断能力の育成に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻 公開日: 2015-04-07 キーワード (Ja): 手合わせゲーム, ボールを持たないときの動き, 運動部活動 キーワード (En): “put-hand-together” game, offensive movement without ball, extracurricular sports 作成者: 加藤, 敏弘, 上地, 勝, 新保, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8175

【 論文 】

バスケットボールスクールの新たな指導体験がコーチングに与える影響
―状況判断能力の育成に着目して―

加　藤　敏　弘[1]・上　地　　勝[2]・新　保　　淳[3]

[1]静岡大学教育学研究科後期３年博士課程・[2]茨城大学教育学部・[3]静岡大学教育学部

要旨

平成 24 年 11 月～平成 26 年 2 月にかけて、中学 1 年生を対象に茨城県バスケットボールスクール（以下、スクールとする）という全く新しいタイプのプロジェクトを実施した[1)]。平成 25 年度は中心的な役割を果たした指導者 4 名（いずれも高校教員）に対してインタビュー調査を実施した[2)]。その結果、それまでのコーチングを反省的にとらえ、スクールでの指導体験によって指導方針に変化が生じ、指導観に変化の兆しがみられた。本研究では、インタビュー調査で明らかにされた内容を量的に確認するために、平成 24・25 年度のスクールに携わった 130 名のうち役員、トレーナー、住所がわからない人を除いた 112 名に対してアンケート調査を実施した（郵送法、回収率 60.7%）。

バスケットボールのコーチングで指導者は、状況判断能力の育成が重要であると感じているものの、その能力を育成する自信があるとはいえない者が多かった。さらに、過去に県ベスト 4 以上にチームを導いたことのある指導者とそうでない指導者、指導者自身がプレイヤーとして過去に県ベスト 4 以上のチームに所属していたことのある指導者とそうでない指導者では、状況判断能力を育成する自信に差があることが明らかとなった。スクールのねらいが子どもたちの状況判断能力の育成であることは理解されていたが、スクール期間中にその成果が達成できたとは考えられていないことが明らかになった。しかし、手合わせゲームなどの新しい教材が状況判断能力の育成に効果的であるとし、自分が指導するチームで取り入れたいと考えられていた。先のインタビュー調査[2)]で語られた「味方との連携に関する具体的な貢献の仕方」についての項目とスクールのカリキュラムの効果に関する項目を合わせて、その構造について分析を行ったところ、３つの因子が抽出された。これら 3 つの因子（味方との連携内容への気づき、状況判断能力の育成、手合わせゲームの効果の認知）は、相互に強く関連していると考えられる。このことは、スクールの前後の変化についての質問で、「味方との連携内容を意識させる指導が大切である」「わかりやすくて丁寧な言葉遣いになった」が肯定されていることや自由記述形式の内容からも裏づけられた。

キーワード

手合わせゲーム、ボールを持たないときの動き、運動部活動

１．問題及び目的

中学や高校における運動部活動は、新学習指導要領総則で「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と明記された[3)]。しかし、2012 年 12 月に顧問教員の体罰を背景として高校生が自ら命を絶つとの痛ましい事案が発生し[4)]、顧問教員の責任は増している。1990 年以降中学校教員はその負担の大きさにもかかわらず運動部顧問を引き受け、やりがいを感じて来た[5)]が、ここに来て顧問のなり手を見つけるのに苦労するという問題が起こっている。生徒の自主的、自発的な活動として一定の成果を上げてきたが、少子化の影響や運動する子どもと運動しない子どもの二極化の影響で部員が集まらず廃部に至るケースもある。それ故、運動部活動に熱心な指導者[6)]とそうでない指導者の格差は広がっている。学校によっては、その経営戦略から特定の運動部活動の強化を図り、他の種目が十分に活動できなくなるなどの影響もでている。

伝統的に日本のスポーツは、学校教育を中心に発展してきたという歴史的経緯を持つ[7)8)]。しかし、2020 年の東京オリンピック開催が決定し、メディアによってにわかにスポーツ競技が活気づいているように見えても、メダル獲得が期待されている競技は、幼少年期からスポーツクラブなどで一貫指導が実現している、水泳であり、体操競技であり、柔道などであり、いずれも学校の運動部活動を中心とした競技ではない。サッカーの場合は、ここ20年ほどのうちにＪリーグを中心にした一貫指導体

制を確立して成果を上げてきている。

こうした複雑な状況の中、世界的に見るとその競技人口が4億5000万人とトップレベルにあるバスケットボールは、日本においても人気の高いスポーツである。しかし、その人気の割に指導者が育たず、未だにベンチから子どもたちに罵声を浴びせている指導者も見受けられる[9)]。本来、中学や高校の運動部活動の目的は、競技力の向上ではない。子どもたちの人間的な成長を促進することであり、主体的な活動によって豊かな経験を積むことが重要である[10)]。その点、バスケットボールはルール上指導者がチームベンチエリアから試合中でも直接プレイヤーに指示を出してもよいことが認められており、指導者の役割が非常に大きい[11)]。それゆえに、子どもたちの主体性を損なうような指導に陥りやすい。状況判断の善し悪しが勝敗を決することにつながることから、経験の深い指導者が戦術を駆使してゲームをコントロールしてしまい、育成年代に応じたプレイヤーの能力開発が進まない。それには、状況判断能力を育成するための方法論を指導者が十分に理解していないことも影響している。

アルベルトの著書を翻訳した村松は監訳者による解説で[12)]、「スペインにおける『戦術』とは、『戦術的規律に基づいて各選手がそれぞれイニシアチブをとり、常に変化する状況に適応しながら、自ら判断し能動的にゲームに参加する』という意味…（中略）…つまりは『自分で見て、考えて、動け』ということです。…（中略）…自分の意見を持ち、それを周囲に伝え、相手の意見を聞いてコミュニケーションをとり、状況を自分で判断し、決断して実行していく。それは日本の子どもたち、いや私を含めた日本人全体がもともと苦手とするところなのかもしれません」と述べている。日本のバスケットボールでは、「いわゆるボール扱いが上手い選手」「監督のいうことをよく聞く真面目で素直な選手」を育てるばかりで、「イニシアチブをもって、自主的に流動的な状況を判断して決断していくマインドやメンタリティーを身に付けている子ども」を育てるにはほど遠い状況にある。

21 世紀型スキルが求めている「協調的問題解決」は「①グループ内の他の人の考え方を理解できる力、②メンバーの１人として、建設的な方法でメンバーの知識・経験・技能を豊かにすることに貢献するように参加できる力、③貢献の必要性やどのように貢献すればよいかを認識できる力、④問題解決のために問題の構造や解決の手続きを見出す力、⑤協調的なグループのメンバーとして、新しい知識や理解を積み上げ、つくり出す力」の大きな 5 つの要素からなるものとして概念化されている[13)]。こうした力は、学校全体で培うものであり、課外活動であってもその目的は変わらない。

現状としてトップリーグが分裂している日本のバスケットボール界では、サッカーのようにクラブを中心とした育成システムを構築することは困難である。また、総合型地域スポーツクラブへの移行も教員文化の影響があり、困難である[14)]。したがってバスケットボールの場合、しばらくは学校の運動部活動を中心に展開されるであろう。制度的な一貫指導体制の樹立が困難である以上、ミニバスケットボールの指導者から中学校や高校の指導者、さらには大学・クラブ・実業団・トップリーグの指導者が共通にそれぞれの年代に必要な指導内容と方法を理解し、連携を図りながらさまざまな問題を多角的に解決するための施策を模索する必要がある。繰り返すが中学校や高校の運動部活動は競技力向上が目的とはされていない。しかし、高度に発展したバスケットボールを子どもたちが楽しむためには、発育発達段階に応じた適切な指導が必要であり、その指導方法を学ぶことは、子どもたちの主体性や自主性を育むことに繋がるのである。だからこそ、中学校や高校の運動部活動を支援するシステムを地方の公的立場に近い一競技団体が実施することには重要な意味がある。茨城県バスケットボールスクールは、全国に先駆けて発足した新しいプロジェクトであり[1)]、そこで指導者がどのように変化していくのかを明らかにすることは、今後の日本の学校と地域社会の架橋に大きな影響を与えるであろう。

本研究の目的は、平成 25 年度に実施したスクールで中心的な役割を果たした高校教員 4 名へのインタビュー調査で明らかにされた「スクールでの指導経験がコーチングに与える影響」について、量的に検証し、指導者育成プログラムの課題を明らかにすることである。特に、状況判断能力の育成に焦点をあてた指導方法について詳細に検討し、今後の指導者の育成の糧としたい。

２．スクールの概要

スクールは、平成 31 年の茨城国体に向けた茨城県バスケットボール協会の育成事業の一つで、中学１年生の希望者を対象に１回２時間、隔週８回、筆者が中心となって考案したカリキュラムに沿って展開される短期プログラムである[1)]。平成 24・25 年度とも 11 月～翌年２月にかけて月曜日の夜を中心に実施した。平成 24 年度は茨城県内 7 会場で 263 名、平成 25 年度は 12 会場で 295 名の参加者を得た。公益財団法人日本バスケットボール協会公認コーチの資格を有する指導者を中心に２年間で指導や運営に携わったメンバーは 130 名であった。スクールの目的、目標、指導方針、カリキュラム内容、実施計画など細部にわたって事前研修会を実施し、統一カリキュラムで指導できるようにした。中学１年生にとっては普段の中学校での運動部活動とは一味違った視点でバスケットボールに取り組むことができるが、それ以上に指導者の資質向上が本事業の目的であり、本研究はその成果を検証し、課題を探索することでもある。指導者には１

表１．回答者の年齢，性別，職業，資格の度数分布

年代	性別		職業							資格				
	男	女	小教員	中教員	高教員	会社員	公務員	自営業	その他	A･B級	C級	D級	その他	なし
20代	6	3	0	3	5	0	0	0	1	0	1	4	0	4
30代	22	2	0	6	14	4	0	0	0	2	6	8	0	8
40代	16	2	1	5	6	1	2	3	0	1	6	6	1	4
50代	10	0	0	2	5	1	2	0	0	0	4	5	0	1
60代	6	1	0	0	0	3	0	0	4	0	3	1	0	3
合計	60	8	1	16	30	9	4	3	5	3	20	24	1	20
	68		47			21				47			21	

（人数）

時間 26 分の指導内容を収録したビデオ映像を、参加者には46分の映像を補助資料としてDVDに収録して事前に配布している。

スクールの重要なねらいの１つである状況判断能力の育成のために「手合わせゲーム」を導入した。手合わせゲームとは、ハーフコートでオフェンスとディフェンスが３人ずつ向かい合って行う課題ゲームである。主なルールは、次のとおりである[15]。①ボールを持っている時を除いて、オフェンスとディフェンスは互いに両手を軽く合わせていなければならない。②ドリブルは禁止なので、オフェンスが保持しているボールを直接ディフェンスが奪ってはいけないが、パスはインターセプトしてもよい。③ボールを持たない２人のオフェンスはパスをもらうために手を離してもよいが、２人が同時に手を離してはいけない。これらのルールによって、ボールを持たないオフェンスプレイヤーはボールを持っている人やもう一人の味方の動きに合わせて状況を判断して行動しなければならない。また、ドリブルを制限しているため、バスケットボール経験者が一人でプレイしてしまうことを防ぐことができ、ディフェンスも自分のマークマンと手を合わせていなければならないので、バスケットボール経験者や長身者が一人でゴール下を守ってしまうことを防ぐ狙いがある。さらにバスケットボールをあまり経験したことのない人でもマンツーマンディフェンスの原則を自然に学ぶことができる教材である（図１）。

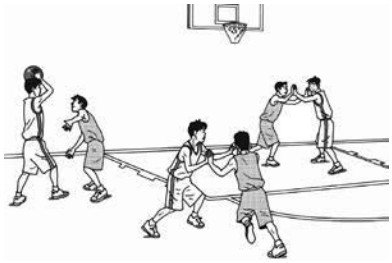

図１．手合わせゲーム
（日本バスケットボール協会 2014，p. 136）

３．研究の方法と調査対象者の属性

質問紙調査を行った。調査期間は、平成 26 年８月で、調査対象者はスクールに携わった 130 名のメンバーから役員、トレーナーを除いた 119 名に対して返信用封筒を同封したアンケート用紙（無記名式）を郵送した。うち７通が住所不明で返送され、期間中回収された回答は 69 通であった。１ 通は全項目無記入であったため、有効回答数は 68 となった。回収率は 60.7%である。

質問項目のうち指導者の属性については、年齢、性別、職業、公認スポーツ指導者資格の種類、指導種目、指導対象、役職、指導時間、報酬の有無、指導歴、指導実績、競技歴、競技実績、研修会・スクール参加頻度を尋ねた。

先のインタビュー調査で抽出された「指導対象者への気づき」「指導内容への新たな発見」「指導方法の工夫」「指導方針の変化」の下位項目を確認するための質問をコーチングに対する考え方(10 項目)、コーチングの際に重視していることがらの程度(35 項目)、それらを指導する自信の程度(35 項目)、普段指導している選手に対する考え(12 項目)、スクールの事前研修会の理解度(7 項目)、スクール参加者についての考え(23 項目)、スクールのカリキュラム内容とその成果(24 項目)、スクールの体験によるコーチングへの影響(19 項目）について７件法で回答を求めた。これらの項目を作成するにあたり、松尾ら(1994)によるボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する調査[16]、中澤ら(1989)のスポーツ指導者の指導信条に関する調査[17]、桑原ら（1999)の少年スポーツ指導者の指導行動に関する調査[18]を参考にした。さらに、スクールの問題点や課題について、体育授業を担当している教員については、体育授業への影響について自由記述を求めた。指導者の属性と７件法の回答については、統計解析ソフト SPSS for Windows 11J に入力し分析し、自由記述についてはKJ 法を用いて分析した。回答者 68 名の属性は表 1～5 のとおりである。

表２．指導対象（年齢別）

年代	指導対象					合計
	実業団	高校	中学	ミニ	クラブ	
20代	0	5	4	0	0	9
30代	1	14	7	2	0	24
40代	0	7	6	4	0	17
50代	0	5	2	3	0	10
60代	0	1	1	3	1	6
合計	1	32	20	12	1	66

（人数）

表 3．指導歴・競技歴（年齢別）

年数	指導歴	競技歴
0～ 5年	12	3
5～10年	19	19
10～15年	8	14
15～20年	7	10
20～25年	12	6
25～30年	4	4
30年以上	4	9
合計	66	65

（人数）

表 4．指導チームの最高成績と指導者の競技成績レベル

大会	レベル	指導成績		競技成績	
全国大会	優勝	4		5	
	ベスト4	3		3	
	ベスト8	1		2	
	ベスト16	5		5	
ブロック大会	優勝	0	34	1	39
	ベスト4	2		2	
	ベスト8	1		1	
	ベスト16	2		3	
県大会	優勝	6		3	
	ベスト4	10		14	
	ベスト8	7		5	
	ベスト16	10		10	
県地区大会	優勝	4	33	1	25
	ベスト4	10		2	
	ベスト8	2		3	
	出場	0		4	
合計		67		64	

（人数）

表 5．スクールへの参加頻度（年度別）

回／8回中	H24				H25			
	参観		指導		参観		指導	
	人数	のべ	人数	のべ	人数	のべ	人数	のべ
0	20	0	27	0	9	0	19	0
1	1	1	3	3	4	4	7	7
2	4	8	4	8	5	10	4	8
3	5	15	5	15	3	9	1	3
4	6	24	7	28	5	20	3	12
5	2	10	2	10	3	15	3	15
6	6	36	3	18	4	24	4	24
7	6	42	4	28	13	91	9	63
8	18	144	13	104	22	176	18	144
合計	68	280	68	214	68	349	68	276

（人数）

４．結果と考察

（1）コーチングについて

①重要度と指導する自信の程度の違いについて

日頃、バスケットボールのコーチングにあたりどのようなことがらをどの程度重要視しているのか（以下、重要度とする）、またそれらを指導する自信がどの程度あるのか（以下、自信度とする）について、それぞれ 35 項目質問した。このうち対応関係が成立している 17 項目について平均値を比較したところ、全ての項目で「重要である」が「自信がある」を上回っていた。さらに重要度と自信度をそれぞれ平均値の高いものから順に並べ、両者の対応関係を実線と点線で結んだ（表 6）。

すると重要度の高い「一生懸命に取り組む（組ませる）こと、自主的に取り組む（組ませる）こと、ルールやマナーを守（らせ）ること、スポーツを楽しむ（ようにする）こと、ケガをしないようにすること」の上位５項目の全てが、自信度ではランクが低くなっていた。これらの項目については、指導者は重要だと思っているが、そのことを指導する自信があるとはいえないということを示していると考えられる。研修会やスクールではこうした項目について取り上げ、指導力を高める施策を講じる必要がある。

バスケットボールの技能に関わる項目では「状況判断力を高めること（重要度 7 位）、選手の戦術的な理解力を高めること（重要度 14 位）」はいずれも自信度のランクが低くなっている。これに対して「個人技能を高めること」は、重要度のランク 12 位より自信度のランクが 1 位と高くなっていた。パス、ドリブル、シュートといった個人技能を指導する自信はあるけれども、状況判断力を高めたり戦術的な理解力を高める指導については、自信があるとはいえないということを示していると考えられる。どちらもスクールのねらいであり、これらの指導力を高める施策が求められている。

「状況判断力を高めること」に関連した質問（表 7）の「プレイのタイミングを合わせられる選手を育てること（4.69）」については、多少自信があるが、「相手チームとのかけ引きができる選手を育てること（4.44）、次のメニューを予想して行動できる選手を育てること（4.31）」については、自信があるともないともどちらともいえない状況である。

表6．重要度と自信度のランク

項 目	平均 重要度	平均 自信度	項 目
7. 一生懸命に取り組む(組めるようにする)こと	6.78	5.54	2. 個人技能を高めること
9. 自主的に取り組む(組ませる)こと	6.74	5.41	4. コミュニケーション能力を高めること
8. ルールやマナーを守(らせ)ること	6.72	5.21	17. チームの団結力を高めること
6. スポーツを楽しむ(ようにする)こと	6.71	5.13	13. まじめに取り組む(組ませる)こと
14. ケガをしないようにすること	6.53	5.10	8. ルールやマナーを守(らせ)ること
4. コミュニケーション能力を高めること	6.53	5.10	12. 自信をつけ(させ)ること
3. 状況判断力を高めること	6.50	5.07	14. ケガをしないようにすること
12. 自信をつけ(させ)ること	6.46	5.04	6. スポーツを楽しむ(ようにする)こと
13. まじめに取り組む(組ませる)こと	6.46	4.96	16. チームが勝利する(勝てるチームを作る)こと
17. チームの団結力を高めること	6.38	4.91	3. 状況判断力を高めること
10. 将来もスポーツを続ける(ようにする)こと	6.13	4.90	10. 将来もスポーツを続ける(ようにする)こと
2. 個人技能を高めること	6.12	4.84	20. チーム(メンバー全員)の試合経験を豊富にすること
11. 選手が勝った喜びを感じ(られるようにす)ること	5.94	4.76	7. 一生懸命に取り組む(組めるようにする)こと
5. 選手の戦術的な理解力を高めること	5.85	4.76	9. 自主的に取り組む(組ませる)こと
20. チーム(メンバー全員)の試合経験を豊富にすること	5.69	4.75	15. たくさんの試合を観戦する(ようになる)こと
15. たくさんの試合を観戦する(ようになる)こと	5.60	4.53	5. 選手の戦術的な理解力を高めること
16. チームが勝利する(勝てるチームを作る)こと	5.38	4.34	11. 選手が勝った喜びを感じ(られるようにす)ること

注:項目番号は重要度の番号　括弧内は自信度の表現

表 7．状況判断能力を高める自信

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
27. プレーのタイミングを合わせられる選手を育てること	2	7	4.69	1.07
28. 相手チームとのかけ引きができる選手を育てること	2	7	4.44	1.11
29. 次のメニューを予想して行動できる選手を育てること	2	7	4.31	1.03

（n＝68）

②指導者の属性（2 群）による差の検討

指導者の指導歴が長い者（10 年 9 ヶ月以上）と短い者（10 年 6 ヶ月以下）で重要度(35 項目)と自信度(35 項目)についてそれぞれ平均の差の検定を行ったところ、表 8 のように 2 項目（重要度 1 項目、自信度 1 項目）について有意差が認められた。「スポーツを楽しむこと」が重要であると両者とも思っているが、指導歴が短い者の方が長い者よりもそのことを重視している。また、「適切なスキルの見本をみせること」について、短い者はやや自信があるけれども長い者は自信があるともないともいえない。加齢により動けなくなってきていることに加え、バスケットボールの場合は次々とルールが変更され、特にドリブルやスクリーンプレイなどについては、昔認められなかったプレイが現在では認められるようになるなどの変化も影響しているものと思われる。

指導したチームの成績が県ベスト 4 以上の者と県ベスト 8 以下の者で平均の差の検定を行ったところ表 9 のように 9 項目（重要度 2 項目、自信度 7 項目）について有意差が認められた。「選手と親しくなること」について県ベスト 8 以下の者がやや重要であるとしているのに対し、県ベスト 4 以上の者は重要であるとも重要でないともいえないとしている。これに対し「指導者として人間的に成長すること」については、両者ともかなり重要であるとしているものの、県ベスト 4 以上の者が県ベスト 8 以下の者よりも重要であると思っている。県ベスト 4 以上の成績を納めたことのある指導者は、選手と親しくなるのではなく、自ら成長していく姿を選手に示すことで信頼関係を築こうとしているものと思われる。

「個人技能を高めること、状況判断能力を高めること、一生懸命に取り組めるようにすること、なにごとにも自主的に取り組むようにすること、試合で適切な判断をすること、プレイのタイミングを合わせられる選手を育てること、周囲の人に感謝の気持ちを持たせること」の 7 項目については、県ベスト 4 以上の成績を納めたことのある指導者の方が県ベスト 8 以下の者よりも自信を持っていると推察される。

指導者の競技歴が長い者（15 年以上）と短い者（14 年 6 ヶ月以下）で平均の差の検定を行ったところ表 10 のように 5 項目（いずれも自信度）について有意差が認められた。バスケットボール競技はめまぐるしくルールが変更されることから、15 年以上競技を続けてきた人は技術や戦術の変遷に精通し、自身もバスケットボールを楽しみつつ、その過程でさまざまなタイプの指導者に出会ってきたと考えられる。そのため、スキルや戦術の修正点を見抜いて指導することに優れ、選手が自主的に練習計画を立てさせるためのわかりやすくて丁寧な指導によってバスケットボールの楽しさを子どもたちに伝えようとしているものと考えられる。

表 8．指導歴の違いによる重要度・自信度の検討

項目	10年9ヶ月以上			10年6ヶ月以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
重要度　6. 選手がスポーツを楽しむこと	32	6.59	0.56	34	6.88	0.33	−2.54	.014
自信度 23. 適切なスキルの見本をみせること	32	4.19	1.03	34	5.00	1.35	−2.74	.008

表 9．指導実績の違いによる重要度・自信度の検討

項目	県ベスト4以上			県ベスト8以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
重要度 22. 選手と親しくなること	34	4.91	1.36	33	5.61	1.27	−2.16	.035
重要度 32. 指導者として人間的に成長すること	34	6.76	0.50	33	6.45	0.67	2.16	.035
自信度　3. 選手の個人技能を高めること	34	5.24	0.85	33	4.61	0.97	2.83	.006
自信度　4. 選手の状況判断能力を高めること	34	5.09	1.16	33	4.45	0.90	2.48	.016
自信度　8. 選手が一生懸命に取り組めるようにすること	34	5.88	1.01	33	5.24	1.09	2.50	.015
自信度 10. 選手がなにごとにも自主的に取り組むようにすること	34	5.44	0.93	33	4.67	1.19	2.98	.004
自信度 24. 試合で適切な決断をすること	34	5.00	1.02	33	4.48	1.00	2.09	.041
自信度 27. プレーのタイミングを合わせられる選手を育てること	34	5.00	0.98	33	4.39	1.09	2.39	.020
自信度 35. 周囲の人に感謝の気持ちを持たせること	34	5.74	1.14	33	5.21	0.99	2.00	.049

表 10．競技歴の違いによる重要度・自信度の検討

項目	15年以上			14年6ヶ月以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
自信度　7. 選手がスポーツを楽しめるようにすること	33	5.79	0.86	32	5.06	1.19	2.83	.006
自信度 21. チームのメンバーで練習計画を立てさせること	33	4.39	1.17	32	3.75	0.98	2.40	.020
自信度 31. 選手にわかりやすく丁寧な言葉づかいをすること	33	5.00	1.12	32	4.31	1.33	2.26	.027
自信度 33. スキルの修正点を見抜いて指導すること	33	5.15	0.91	32	4.66	1.07	2.02	.048
自信度 34. 戦術の修正点を見抜いて指導すること	33	5.12	0.99	32	4.44	1.11	2.63	.011

表 11．競技成績の違いによる重要度・自信度の検討

項目	県ﾍﾞｽﾄ4以上			県ﾍﾞｽﾄ8以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
自信度 3. 選手の個人技能を高めること	39	5.21	0.80	25	4.52	1.08	2.72	.010
自信度 4. 選手の状況判断能力を高めること	39	5.08	1.01	25	4.32	1.11	2.82	.006
自信度 6. 選手の戦術的な理解力を高めること	39	5.13	1.08	25	4.44	0.96	2.59	.012

表 12．コーチ資格の有無による重要度・自信度の検討

項目	有			無			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
重要度 2. 選手の個人技能を高めること	47	6.28	0.68	21	5.76	1.00	2.48	.016
重要度 13. 選手がまじめに取り組むこと	47	6.64	0.49	21	6.05	1.07	2.42	.024
重要度 24. 選手を尊敬する態度で接すること	47	5.57	1.12	21	4.95	1.12	2.12	.038
自信度 1. 選手の体幹を鍛えること	47	4.81	0.82	21	5.43	1.16	−2.20	.035
自信度 21. チームのメンバーで練習計画を立てさせること	47	4.30	1.10	21	3.71	1.06	2.04	.045
自信度 22. チームメンバー全員の試合経験を豊富にすること	47	4.94	0.94	21	4.33	0.97	2.42	.018

指導者の競技成績が県ベスト４以上と県ベスト８以下で平均の差の検定を行ったところ表 11 のように３項目（いずれも自信度）について有意差が認められた。指導者自身の競技成績が県ベスト４以上は、「選手の個人技能を高めること」、「状況判断能力を高めること」、「戦術的な理解力を高めること」について自信がややあり、競技成績が県ベスト８以下は自信があるともないともどちらともいえない。スクールの主なねらいである状況判断力の育成を図るためには、まず競技成績が比較的高い指導者を中心にその育成方法の普及を図り、徐々に多くの指導者に広げるのが効果的であると考えられる。

バスケットボールの資格を持っている者と持っていない者について平均の差の検定を行ったところ表 12 のように６項目（重要度３項目、自信度３項目）について有意差が認められた。「選手の体幹を鍛えること」については、資格を持っていない者の方が自信を持っていた。これは、資格を持っていない指導者が陸上競技などを経験してきたことが影響しているものと考えられる。資格取得のための講習会のテキスト[11]では、最初に「指導者の役割」が扱われ、選手を尊敬する態度でコーチングすることが強調されている。また、さまざまな知識を得るばかりでなく指導者自身で練習計画を立案するなどの作業も義務づけられていることから、資格を持っている指導者がそれらに自信を持っているものと考えられる。

（２）スクールについて

①事前研修会の配布資料について

事前研修会で配布された資料の理解度や DVD の視聴について尋ねたところ表 13 のようになった。また、指導者の属性で２群に分けてその平均の差を検定したところ、指導したチームの成績が県ベスト４以上の者と県ベスト８以下の者で３項目(5, 6, 7)（表 14）、指導者の競技歴が 15 年以上の者と 14 年６ヶ月以下の者で２項目(4, 6)（表 15）、指導者の競技成績が県ベスト４の者と県ベスト８以下の者で６項目(1, 2, 3, 4, 5, 6)（表 16）について、有意差が認められた。指導歴の長短、資格の有無では有意差は認められなかった。これらのことから事前研修会で配布された資料を読み解く力は、指導者のバスケットボール競技に対する経験の深さと関係があると推察され、高山の指摘[19]を裏付けるものである。中学校ではバスケットボールをプレイヤーとして経験したことがない教員が顧問となるケースがあることを考えると、研修会や配布資料はさらにわかりやすい内容にする必要がある。

②スクールの参加者について

普段指導している対象者と比較してスクールの参加者に対してどう思ったかについて質問したところ（表 17）、参加者の様子について「参加者の技能レベルに大きな格差があった(5.9)、楽しそうだった(5.7)、可能性がある(5.3)、意欲があった(5.3)、自主的に取り組んでいた(4.5)、コミュニケーション能力が高かった(3.8)、マナーが悪かった(3.7)」となった。

表 13．事前研修資料の理解度

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
1. スクールの目標を理解した	1	7	5.39	1.29
2. スクールの方針を理解した	1	7	5.35	1.21
3. 全体カリキュラムを理解した	1	7	5.27	1.25
4. ゲームの条件設定を理解した	1	7	5.12	1.32
5. トレーニングを理解した	1	7	5.36	1.25
6. 姿勢づくりを理解した	1	7	5.36	1.27
7. DVDの映像をよく見た	1	7	5.52	1.29

（n = 66）

表 14．指導実績の違いによる資料理解度の検討

項目	県ﾍﾞｽﾄ4以上			県ﾍﾞｽﾄ8以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
5. トレーニングを理解した	32	5.72	1.02	33	5.06	1.37	2.19	.032
6. 姿勢づくりを理解した	32	5.78	0.87	33	5.00	1.48	2.59	.012
7. DVDの映像をよく見た	32	5.91	1.17	33	5.15	1.33	2.43	.018

表 15．競技歴の違いによる資料理解度の検討

項目	15年以上			14年6ヶ月以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
4. ゲームの条件設定を理解した	32	5.59	1.04	31	4.81	1.30	2.65	.010
6. 姿勢づくりを理解した	32	5.75	0.80	31	5.13	1.41	2.16	.035

表 16．競技成績の違いによる資料理解度の検討

項目	県ﾍﾞｽﾄ4以上			県ﾍﾞｽﾄ8以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
1. スクールの目標を理解した	38	5.74	1.00	24	4.96	1.60	2.36	.022
2. スクールの方針を理解した	38	5.63	0.91	24	5.00	1.56	2.01	.049
3. 全体カリキュラムを理解した	38	5.61	0.92	24	4.88	1.60	2.29	.026
4. ゲームの条件設定を理解した	38	5.53	1.01	24	4.58	1.61	2.84	.006
5. トレーニングを理解した	38	5.74	0.92	24	4.83	1.55	2.88	.005
6. 姿勢づくりを理解した	38	5.84	0.86	24	4.71	1.57	3.24	.003

表 17. スクールの参加者について

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
2. 技能レベルに大きな格差があった	2	7	5.85	1.09
1. 楽しそうだった	3	7	5.71	1.11
4. 可能性がある	2	7	5.34	1.29
5. 意欲があった	2	7	5.34	1.16
8. 自主的に取り組んでいた	1	7	4.46	1.25
3. 基礎的身体能力が高かった	1	7	4.20	1.41
9. コミュニケーション能力が高かった	1	7	3.77	1.28
7. マナーがわるかった	1	7	3.66	1.62

（n = 65）

表 18. スクール参加者の学習成果について

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
6. ボール操作がうまくなった	2	7	5.26	1.00
22. タイミングを合わせることがうまくなった	2	6	4.46	1.03
14. 視野が広がった	1	6	4.46	1.02
13. ボールをもたない時の動きを理解するようになった	1	6	4.40	1.03
10. 状況判断能力が高まった	1	7	4.35	1.14
15. 相手の動きを読むようになった	1	6	4.15	1.02
11. 体幹が強くなった	1	6	4.11	0.97
23. 戦術を理解する能力が高まった	2	6	4.02	1.12
12. 柔軟性が向上した	1	6	3.91	0.93

（n = 65）

スクールでのコーチングの成果について（表 18）は、「ボール操作がうまくなった(5.3)、タイミングを合わせることがうまくなった(4.5)、視野が広がった(4.5)、ボールを持たない時の動きを理解するようになった(4.4)、状況判断能力が高まった(4.4)、相手の動きを読むようになった(4.2)、柔軟性が向上した(3.9)」となった。

これらのことから、技能レベルに大きな格差がある中学１年生に対して、スクールのねらいである「ボールを持たないときの動き」や「状況判断能力」を育成することの難しさに直面し、結果として個人技能の中でもその成果が目につきやすい「ボール操作の向上」のみが、コーチングの成果として認められたと考えられる。このことは、スクールの運営面について先の調査[2)]で指摘されていた「スクールの回数と時間が少ない割に、集まってくるこどもたちの技能レベルに格差があり、しかも、指導する内容が多いので、時間を増やすか内容を減らすかした方がよい」という提言を裏づける結果となった。

指導歴の長短、指導したチームの成績の高低、指導者の競技歴の長短、指導者の競技成績の高低、資格の有無で平均の差の検定を行ったが、いずれも特徴的な有意差は見られなかった。

③スクールの練習内容とその効果について

スクールの練習内容とその効果(14 項目) について普段の練習内容と比べてどうであったかについて質問したところ（表 19）、「工夫されていた(5.4) 、ゲームの条件の付け方がよかった(5.4)、味方とタイミングを合わせるのに手合わせゲームが効果的である(5.3)、味方と連携するのに手合わせゲームが効果的である(5.3)、ケガをしない動きづくりが示されていた(5.3)、相手との駆け引きを学ばせるのに手合わせゲームが効果的である(5.2)、段階的・系統的であった(5.2)、ボールをもたない時の動きを理解するようになった(4.8)、視野が広がった(4.8)、タイミングを合わせることがうまくなった(4.8)、相手の動きを読むようになった(4.6)、難しかった(3.9)」となった。指導者は、ゲームの条件の付け方や、手合わせゲームが効果的であると肯定しているが、それらを実際にかみ砕いてスクールのねらいを達成させるほどにスクールの対象者に対してコーチングができなかったと考えている。

手合わせゲームなど新しく提案した教材を普段の練習で取り入れたいかを尋ねたところ（表 20）、「スタビライゼーションを取り入れたい(5.9)、ルーズボールゲーム[20)]を取り入れたい(5.3)、手合わせゲームを取り入れたい(5.1)」となった。指導者はこれらの教材をスクールでは十分に指導することができなかったけれども、自分のチームで試したいと思っていると考えられる。

指導者の指導歴の長短、指導したチーム成績の高低、指導者の競技歴の長短、指導者の競技成績の高低、資格の有無で平均の差の検定を行ったが、いずれも特徴的な有意差は見られなかった。

④スクールの練習内容とその効果の構造

スクールの練習内容とその効果に対する質問 14 項目にインタビュー調査で抽出された味方とのつながりについての質問（6 項目）を加えて、因子分析を行った。抽出法は最尤法を用い、因子数は固有値 1 以上を基準として抽出、斜交回転（プロマックス回転）を用いた。因子負荷量が 0.45 未満の項目を除き再度同様の抽出法と回転を行った。因子負荷量が 0.45 未満の項目がなくなるまで、この手続きを繰り返した。その結果、表 21 に示す 3 因子が抽出された。第 1 因子を「味方との連携内容への気づき」、第 2 因子を状況判断能力の育成」、第 3 因子を「手合わせゲームの効果の認知」と解釈した。

表 21 の因子負荷行列を見ると、第 1 因子はいずれの項目も第 2 因子と第 3 因子の両方に対して高い因子負荷量を示しており、これら三つの因子は相互に強く関連していると考えられる。

表 19. スクールの練習内容について

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
4. 工夫されていた	2	7	5.45	0.97
7. ゲームの条件の付け方がよかった	3	7	5.40	0.98
10. 味方とタイミングを合わせるのに手合わせゲームが効果的である	2	7	5.29	1.04
8. 味方と連携するのに手合わせゲームが効果的である	2	7	5.29	1.07
12. ケガをしない動きづくりが示されていた	2	7	5.29	1.10
9. 相手とのかけ引きを学ばせるのに手合わせゲームが効果的である	2	7	5.20	1.05
1. 段階的・系統的であった	2	7	5.18	1.14
14. ボールをもたない時の動きを理解するようになった	2	7	4.83	1.07
15. 視野が広がった	2	7	4.78	1.05
23. タイミングを合わせることがうまくなった	2	7	4.77	1.06
16. 相手の動きを読むようになった	2	7	4.60	1.06
3. 新しかった	1	7	4.54	1.38
24. 戦術を理解する能力が高まった	2	7	4.51	1.17
2. 難しかった	1	7	3.86	1.54

（n = 65）

表 20. 新しい教材の採用について

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
11. スタビライゼーションを取り入れたい	2	7	5.88	0.94
6. ルーズボールゲームを取り入れたい	2	7	5.32	1.12
5. 手合わせゲームを取り入れたい	2	7	5.12	1.21

（n = 65）

表 21. 手合わせゲームの効果に関する項目の因子負荷行列

	F1	F2	F3
F1：味方との連携内容（貢献の仕方）への気づき（α＝.985）			
20. 自分が得点するのと同じぐらい味方にシュートしやすいパスを出すことの大切さに気づくようになった	**.985**	.600	.473
21. 自分が得点するのと同じぐらい味方がシュートしやすいスペースを空けることの大切さに気づいた	**.980**	.569	.452
22. 自分が得点するのと同じぐらい相手を自分に引きつけておくことの大切さに気がつくようになった	**.974**	.570	.470
19. シュートができたのは味方が相手を引きつけておいてくれたおかげであると気がつくようになった	**.965**	.617	.504
18. シュートができたのは味方がスペースを空けてくれたおかげであると気がつくようになった	**.923**	.594	.440
17. シュートができたのは味方のパスのおかげであると気がつくようになった	**.894**	.622	.402
F2：状況判断能力の育成（α＝.920）			
15. 視野が広がった	.566	**.930**	.146
16. 相手の動きを読むようになった	.751	**.863**	.231
14. ボールをもたない時の動きを理解するようになった	.398	**.819**	.073
23. タイミングを合わせることがうまくなった	.712	**.812**	.208
24. 戦術を理解する能力が高まった	.660	**.739**	.208
F3：手合わせゲームの効果の認知（α＝.944）			
9. 相手とのかけ引きを学ばせるのに手合わせゲームが効果的である	.464	.118	**.957**
10. 味方とタイミングを合わせるのに手合わせゲームが効果的である	.460	.163	**.944**
8. 味方と連携するのに手合わせゲームが効果的である	.412	.171	**.864**
因子抽出法：最尤法	F1		
回転法：Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法	F2 .631		
	F3 .467	.146	

今後、研修会などで、手合わせゲームを導入する際に味方と連携するための具体的な貢献の仕方に気づくことができるような発問を心がけたコーチングを強調することによって、状況判断能力の育成をより効果的に実現することができるものと思われる。

（３）コーチングの変化について

スクール指導を体験（見学）する前と後で、コーチングに対する変化があったかどうかについて、インタビュー調査で浮き彫りにされた項目を中心に質問したところ、表 22 のようになった。平均 5.0 以上が 19 項目中 13 項目となり、その中でも状況判断能力の育成に関与する「味方の位置やマークマンを意識させる指導が大切である(5.4)、ヘルプディフェンスの位置を意識させる指導が大切である(5.4)、わかりやすくて丁寧な言葉遣いになった(5.2)、選手が自分で気がつくような発問ができるようになった(5.2)」が上位 6 項目の中に入った。さらに、「選手の熟達化が必要である(5.2)、選手の成長過程にふさわしい指導が大切である(5.2)」と先のインタビュー調査[2)]で明らかにされた重要項目が上位を占めていることから、質的調査で得られた結果が量的にも裏づけられたと考えることができる。

指導者の属性で 2 群に分けてその平均の差を検定したところ、指導歴 10 年 9 ヶ月以上の者と 10 年 6 ヶ月以下の者で 3 項目（表 23）、指導したチームの成績が県ベスト 4 以上と県ベスト 8 以下で 2 項目（表 24）、指導者の競技歴 15 年以上と 14 年 6 ヶ月以下で 2 項目（表 25）有意差が認められた。指導歴が短い者は長い者に比べ「情熱や熱意、ルールやマナー、一生懸命がんばること」が大切であると変化した。同様に指導者の競技歴が短い者の方が長い者より「ルールやマナー、一生懸命がんばること」が大切であると変化した。特筆すべきは、指導したチームの成績が県ベスト 4 以上の者の方が県ベスト 8 以下の者よりも「相手とのかけ引きを感じさせる指導が大切であると考えるようになり(5.5)」、「選手が自分で気がつくような発問ができるようになった(5.3)」としている点である。先のインタビュー調査[2)]の対象者と同様、競技志向が高く、チームの成績で成果をあげたことのある指導者は、スクールの指導体験によって指導者主体の指導からプレイヤー主体の指導へ転換する兆しがみられたことを裏づけるものである。

（４）体育授業への影響について

体育授業への影響については、15 名から 27 項目の回答を得た。これらをまとめると次のようになった。

①授業内容について(11)

・授業の導入部分で楽しませる内容を盛り込んだ(2)

・スクールでの指導内容を授業で活用した(9)

例）ルーズボールゲーム、オーバーハンドレイアップ、体幹トレーニング

表 22. スクール指導体験前後の変化

順	項目	1	2	3	4	5	6	7	平均値	標準偏差
1	選手の成長過程にふさわしい指導が大切であると考えるようになった	1		1	3	23	23	15	5.67	1.09
2	チームオフェンスを成功させるためには、味方の位置やマークマンを意識させる指導が大切であると考えるようになった	1	1		7	21	22	14	5.55	1.18
3	チームオフェンスを成功させるためには、ヘルプディフェンスの位置を意識させる指導が大切であると考えるようになった		3		7	25	17	14	5.44	1.20
4	指導者同士の交流を深めることが大切であると考えるようになった	2		2	11	14	23	14	5.42	1.35
5	チームワークを高めることが大切であると考えるようになった	3		5	8	18	19	13	5.23	1.49
6	指導の際にわかりやすくて丁寧な言葉遣いになった			4	14	22	16	10	5.21	1.13
7	普段自分が指導しているプレイヤーの過去や未来を考えるようになった		3	1	11	24	18	9	5.21	1.20
8	スクールのDVDや本などを参考にして練習内容を考えるようになった		2	4	9	24	17	10	5.21	1.22
9	相手とのかけ引きを感じさせる指導が大切であると考えるようになった	1	2	3	12	22	15	11	5.14	1.33
10	スポーツ指導では選手の熟(じゅく)達(たつ)化(か)が必要であると考えるようになった		1	2	12	30	14	7	5.14	1.04
11	スポーツ指導では情熱や熱意が大切であると考えるようになった	3	1	3	14	14	20	11	5.11	1.50
12	戦術を実践するチーム全体の技能が大切であると考えるようになった	1	1	4	10	28	13	9	5.09	1.24
13	ボールを操作する技能の指導が大切であると考えるようになった	1	2	4	10	27	15	7	5.02	1.26
14	一生懸命にがんばることが大切であると考えるようになった	3		6	12	20	15	10	4.98	1.46
15	マナーやルールなどの約束ごとを守らせる指導が大切であると考えるようになった	2	1	6	13	19	16	9	4.97	1.41
16	選手が自分で気がつくような発問ができるようになった	1	3	3	14	23	16	6	4.92	1.29
17	体力を高める指導が大切であると考えるようになった	2	2	6	14	20	12	10	4.88	1.46
18	チームの戦術的な知識を増やし理解を高めることが大切であると考えるようになった	1	2	8	12	23	14	6	4.82	1.32
19	勝つことへのこだわりが大切であると考えるようになった	5	3	15	17	17	5	4	4.05	1.49

（n＝66）

表 23．指導歴の違いによる変化の検討

項目	10年9ヶ月以上			10年6ヶ月以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
9. スポーツ指導では情熱や熱意が大切であると考えるようになった	31	4.71	1.35	33	5.55	1.37	−2.46	.017
11. マナーやルールなどの約束ごとを守らせる指導が大切であると考えるようになった	31	4.68	1.11	33	5.33	1.47	−2.00	.049
12. 一生懸命にがんばることが大切であると考えるようになった	31	4.68	1.25	33	5.36	1.45	−2.02	.048

表 24．指導実績の違いによる変化の検討

項目	県ﾍﾞｽﾄ4以上			県ﾍﾞｽﾄ8以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
6. 選手が自分で気がつくような発問ができるようになった	32	5.28	1.25	33	4.55	1.25	2.37	.021
13. 相手とのかけ引きを感じさせる指導が大切であると考えるようになった	32	5.47	1.39	33	4.79	1.22	2.10	.040

表 25．競技歴の違いによる変化の検討

項目	15年以上			14年6ヶ月以下			t 値	有意確率（両側）
	n	平均値	標準偏差	n	平均値	標準偏差		
11. マナーやルールなどの約束ごとを守らせる指導が大切であると考えるようになった	32	5.44	1.13	31	4.55	1.57	2.59	.012
12. 一生懸命にがんばることが大切であると考えるようになった	32	5.38	1.16	31	4.65	1.68	2.01	.049

②指導方法について(13)
・褒める指導に変化した(4)
・対象者に応じた言葉のかけ方や伝え方を意識した(5)
・対象者に応じた段階的指導を意識した(4)
③授業の成果について(2)
・多角的にプレイを観察できるようになった(1)
・生徒が味方と連携してスペースを活かすプレイができるようになった(1)
④変化なし(1)
・指導の仕方が普段と同じなので変わっていない

１名を除いて回答のあった 14 名は体育授業においてスクールの内容を取り入れ、対象者に応じた声かけを意識するようになっていた。さらに「生徒が味方と連携してスペースを活かすプレイができるようになった」との回答を得たことは、今後、本スクールを体験した体育教員が、味方との連携に関する具体的な貢献の仕方に気がつくような発問を行う可能性を示しており、体育授業においても状況判断能力の育成に繋がるものと考えられる。

５．結論と今後の課題

8 回という限られた時間の中で、技能レベルに格差のある中学１年生に対して、状況判断能力を育成することができたと考えている指導者はいない。状況判断能力の育成は、その重要性が認められているものの、それを指導する自信があるとはいえない項目であった。しかし、参加した指導者の多くが状況判断能力を育成するための具体的な手がかりを得たと感じており、今後、普段自分が指導しているチームで試したいと考えている。手合わせゲームを通じてボールをもたない時の連携の具体的な貢献の仕方に気づかせるような発問によって、子どもたちが主体的に状況判断能力を高めることができると指導者が気づき始めている。特に県ベスト４以上の指導実績をあげたことのある指導者が、選手が自分で気がつくような発問ができるようになったと回答している点は、指導者主体の戦術を展開することよりも、プレイヤーの状況判断能力を中心とした熟達化が勝利への近道であると認識しつつあることを示している。また、子どもたちの意識を変えるためには、成長過程に合わせた、わかりやすくて丁寧な言葉遣いが重要であることに気づき、体育授業にも影響している。森田らは、手合わせゲーム、ルーズボールゲーム、ボールつなぎゲームを取り入れた学校体育授業におけるバスケットボールの単元計画を提案している[21]が、このうち本研究ではルーズボールゲームについて、体育授業への導入例が見られた。

サッカーでは、ボールをもたない時の動きの具体的な動き方や体の使い方が示されている[22]が、バスケットボールでは、プレイパターンやフォーメーションとして紹介されることが多い。勝利と育成を両立させているスペインのように、子どもたちが主体的に仲間と関わりながら次々と変化する状況を見て、考えて、行動する力を伸ばすことができる指導者が求められている。

『学習する学校』でも紹介されているように[23]、バスケットボールはチームをオープンなシステムとして取り扱うことで、指導者とプレイヤーばかりでなくプレイヤー同士の好循環を作り出すことができるとされている（図 2）。学校の運動部活動でバスケットボールは体育館という閉じられた空間の中で活動することが多い。もちろん他の種目と平行して活動することもあるが、グラウンドのように一般の人や父兄が気軽に練習を見学するようなオープンな雰囲気はない。今回のスクールの成果はもしかすると普段のクローズされた空間ではなく、複数の指導者が一緒になってオープンな場でコーチングを

することから生まれているのかも知れない。

学校の運動部活動でバスケットボールを通じて子どもたちの協調的問題解決能力を育成するためには、まずは指導者同士が協調してコーチングの問題を解決することから始めなければならない。そして、従来の戦術のとらえ方から脱皮し、子どもたちが主体的に状況判断能力を高められるようなコーチングを指導者が理解し共有することが必要である。

今後は、これまでの調査で明らかになったスクール参加者の技能レベルの格差を是正することなどの運営上の問題点の解決を図りつつ、スクールを通じて多くの指導者と協調しながら問題解決を図りたい。

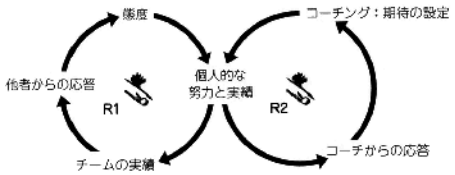

図２．フィードバックループ（ピーター，2014, p. 766）

謝辞：本研究は、科学研究費補助金一般研究(C)「ゴール型ゲームの運動課題と評価の観点～条件制御で誘発される運動技能を探る～」（課題番号 22500560）で得られた成果を元にカリキュラムを構成して、茨城県バスケットボール協会のご協力を得て実現した。多大なフィールドを提供して下さり、ご協力をいただいた全ての協会役員、バスケットボール指導者、そして中学１年生とその保護者をはじめ、バスケットボールスクール指導の補助に携わって下さったすべての高校生、大学生に感謝いたします。

注

1)加藤敏弘(2014)茨城県バスケットボールスクールの成果と課題，茨城大学教育学部紀要(教育科学)，63，457-476.

2)加藤敏弘，新保淳(2014)バスケットボール指導者の指導観の変容過程：茨城県バスケットボールスクールの指導を体験して，教科開発学論集(愛知教育大学・静岡大学)，2，117-127.

3)文部科学省(2008)中学校学習指導要領：総則編．ぎょうせい．

4)運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議(2013)運動部活動の在り方に関する調査研究報告書：一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して．運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議(文部科学省)，1.

5)中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議(1997)運動部活動の在り方に関する調査研究報告書．中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議.

6)中澤篤史(2011)なぜ教師は運動部活動へ積極的にかかわり続けるのか：指導上の困難に対する意味づけ方に関する社会学的研究．体育学研究，56：373-390.

7)中澤篤史(2011a)学校運動部活動の戦後史(上)：実態と政策の変遷．一橋社会科学，3：25-46.

8)中澤篤史(2011b)学校運動部活動の戦後史(下)：議論の変遷および実態・政策・議論の関係．一橋社会科学，3：47-73.

9)日本ミニバスケットボール連盟(2014)すべてのプレイヤー・指導者・保護者・観客に贈るミニバスケットボール5つの心得．「体罰、言葉の暴力は厳禁です」と記載されており、今なお根絶に向けた努力が続けられていることが示されている。

10)関喜比古(2009)問われている部活動の在り方：新学習指導要領における部活動の位置付け．立法と調査，294：51-59.

11)公益財団法人日本バスケットボール協会編(2014)バスケットボール指導教本改訂版上巻，大修館書店，2-11.

12)アルベルト・プッチ・オルトネーダ／村松尚登監訳(2011)FCバルセロナの人材育成術 なぜバルサでは勝利と育成が両立するのか，アチーブメント出版，19.

13)P.グリフィン，B.マクゴー，E.ケア／三宅なほみ監訳(2014)21 世紀型スキル：学びと評価の新たなかたち，北大路書房，9.

14)谷口勇一(2014)部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討：「失敗事例」からみえてきた教員文化の諸相をもとに．体育学研究，早期公開，1-18.

15)加藤敏弘・木村勇(2008)「手合わせゲームの実践．体育科教育，56(2)：32-36.

16)松尾哲矢，多々納秀雄，大谷善博，山本教人(1994)ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会的研究：指導への過度没頭と生活支障の関連及びその規定要因について，体育学研究，39，163-175.

17)中澤眞，平川澄子，杉田文章(1989)スポーツ指導者の「指導信条」に関する社会的研究Ⅲ：スポーツ指導者の勢力資源との関係を中心に，日本体育学会大会号(40A)，145.

18)桑原奈緒子，柳敏晴，向山貴仁，竹下俊一，川西正志(1999)少年スポーツ指導者の指導行動に関する研究：指導者の指導の目的と保護者の期待の違いに着目して，日本体育学会大会号(50)，270.

19)高山千代(2000)運動部指導者の現状と問題点(小中高校の比較とまとめ)：バスケットボール部指導者への調査をもとに．新潟青陵女子短期大学研究紀要，30：37-56.

20)加藤敏弘(2013)バスケットボール，ステップアップ高校スポーツ，大修館書店，102-123.

21)森田勝，吉野聡，加藤敏弘(2014)ボールを持たないときの動きに焦点をあてたバスケットボールの授業モデル，茨城大学教育学部紀要(教育科学)，63，437-455.

22)村松尚登(2014)DVD 付最速上達サッカー：オフ・ザ・ボール，成美堂出版.

23)ピーター・M・センゲ／リヒテルズ直子訳(2014)学習する学校：子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する，英治出版，762-766.

【連絡先　加藤敏弘　E-mail：tosikato@mx.ibaraki.ac.jp】

Impact on the Coaching from a New Experience in Ibaraki Basketball School

— By Focusing on the Development of Situational Judgment Ability —

Toshihiro KATO[1], Masaru UEJI[2], Atsushi SHIMBO[3]

[1]*Graduate School of Education Cooperative Doctoral Course in Subject Development, Shizuoka University*
[2]*Faculty of Education, Ibaraki University*
[3]*Faculty of Education, Shizuoka University*

Abstract

From November 2012 to February 2014, we implemented "Ibaraki Basketball School" (hereinafter referred to as IBS), an entirely new type of project for seventh grade students. In 2013, we conducted investigative interviews with four high school coaches who played pivotal roles in IBS. The interviews revealed that their experience at IBS made them review their past coaching methods and reconsider their coaching philosophies (Kato and Shimbo 2014).

In this study, we conducted a questionnaire survey of 112 individuals who participated in IBS for two years (mailing method, the response rate was 60.7%), in order to confirm quantitative value of the above mentioned study.

The survey shows there are many coaches who think developing situational judgment ability is important but are not confident enough in developing such ability. It has also become clear that there is a marginal difference in their level of confidence to develop situational judgment ability between coaches who led their teams to the top four in the prefecture and who have not, as well as between coaches who themselves played for the prefectural top four teams and who did not. It also shows that coaches did not think they developed players' situational judgment ability at IBS even though they knew that was the aim of the school. On the other hand, they think new drills, such as "put-hand-together" game, are effective for developing situational judgment ability and they want to introduce these drills to their team practices. By analyzing the structure of items which are related to "how to contribute to cooperative play with teammates" and effects of the curriculum of IBS, three factors were extracted. It is suggested that asking questions which are related to cooperative play with teammates during "put-hand-together" game leads to developing situational judgment ability. This is also ensured by some of the comments to questionnaires regarding changes before and after IBS; e.g. "Guidance to improve the awareness of the cooperative play with teammates is important" and "Started to use simple and polite words more" and some other free-form comments made.

Keywords

"put-hand-together" game, offensive movement without ball, extracurricular sports